



第1回の疑問と回答は、
こちらからご覧いただけます。



教えて!先輩

未来の先生からの疑問をずばっと解決

第2回 四国大学文学部書道文化学科

太田剛先生のもとで学ぶみなさん

回答

藤井浩治

(元広島県尾道市立御調西小学校校長)



書写教育について学ぶ未来の先生たちの疑問に、藤井浩治先生がお答えする本連載。初回に続き、徳島県吉野川のほとり、四国大学をたずねました。書道文化を総合的に探究できる書道文化学科には、教員や書塾の指導者を目指す学生が多数在籍しています。学生からの疑問にお答えする、第二回です。



「自分が書けることと教えることはまったく別のこと。子どもの意欲を喚起する楽しい指導方法を、自分なりに考えてほしい」という太田先生。

Q

書写に苦手意識をもっている子のやる気を引き出すコツはありますか。



三年生で初めて「新しい筆」を持ったときの子どもたちは、本当にいい顔をしています。初めて筆に墨をつけて書いたときには、笑顔がこぼれます。

こんな子どもたちが、どうして「書写」と聞いただけで嫌な顔をするようになってしまったのでしょうか。私の経験からは、「書写」への劣等感をもつてしまっている場合が多かったように思います。

「教科書の手本（以下、「手本」と全く似ていない）」「友達と比べて自分は下手だ」など、マイナスの体験を積み上げてきてしまっていることが原因の一つです。そこで、

の中心となる学習内容」の指導は、「既習の学習内容」の確認と区別して行い、授業のポイントを絞ります。その絞ったポイント（授業のねらい）ができてさえいればその時間の目標は達成です。机間指導の際にもポイントのみに絞って声掛けをします。「〇〇ができています。よく書けたね。」と短い言葉でできるだけたくさんの子どもに肯定的な言葉を掛けましょう。他の子どもに聞こえるように褒めることで、できていない子にできていないと指摘しなくても、自分で気づかせることができます。

Q

水書板の効果的な使い方
を教えてください。授業のどんなときに使うとよいのか知りたいです。



「水書板」はどこでも手軽に準備し、範書できる便利な教具です。水書板の使用で、特に教育効果の高い場面は、基本点画の学習です。三年生になり人生で初めて筆を持つことは、子どもたちにとってわくわく、どきどきする非常に楽しみな学習活動です。しかし、筆使いが上手くできないと、一気に「楽しみ」は「劣等感」へと変わってしまいます。筆使いの技能の定着を支援するために、水書板を使って基本点画に焦点化して指導をします。「始

筆」「送筆」「終筆」の筆使いを具体的に丁寧に示すとよいでしょう。

その他、子どもたちがつまずきやすい筆使いとして①「縦画」の「はね」②「曲がり」の「はね」③平仮名の「むすび」などがあります。「はね」の手前で「穂先の向き」を変えたり、「むすび」の途中で「穂先」を裏返したりするなどの細かな筆使いは、言葉で説明することはできませんので、水書板でゆっくり示範し、空書き、ワークシートで練習させるとよいでしょう。示範の際には、課題文字を全部書いてしまわず、ポイントを焦点化するようにしましょう。

二回にわたって、四国大学のみなさんの質問にお答えしてきました。自分なりにではありますが、このような工夫をしながら、私は、子どもたちの書写に対する劣等感を取り除き、子どもたちのやる気と集中力を高めようとしています。

太田 剛

四国大学文学部書道文化学科教授。朝鮮半島書道史、近世近代日本書道史、地域社会と学校との連携による書道教育について研究している。

藤井浩治

元広島県尾道市立御調西小学校校長。光村図書小学校・中学校『書写』教科書編集委員。

③「試し書き」と「まとめ書き」を比較する

授業の最初に、手本を見ないで、まずは

